那覇市公会堂の設計体制と風土性の表現に関する研究

～戦後沖縄の地域主義的建築活動に関する研究 その2～

STUDY ON THE DESIGN OF THE NAHA CIVIC HALL

Study on design activity of the regionalism in postwar Okinawa Part 2

前田 慎*, 小倉 暢之**

Makoto MAEDA and Nobuyuki OGURA

This paper examines the design activity of the regionalism in postwar Okinawa. Okinawa where has characteristic tropical traditional culture and advanced reinforced concrete construction technology and industry, has been reversed from U.S.A. to Japan in 1972. Around the time, it has been one of main interests among local architects to aim for the design based on regionalism that expresses their cultural identity with modern methods. The paper has a focus on the design activity of the regionalism in postwar Okinawa, especially on the concepts and design methods of "the Naha civic hall" that has revealed a characteristic approach for the local architecture.

Keywords : Okinawa, Traditional design, Architect, Modern architecture, Climate, Regionalism

沖縄, 伝統意匠, 建築家, 近代建築, 風土, 地域主義

1. はじめに

戦後沖縄近代建築の特徴は、戦後復興で広く用いられた鉄筋コンクリート造（以下、RC造）や補強コンクリートブロック造の近代建築技術が急速に広まり定着した事¹⁻⁶⁾、温帯気候を中心とした日本において沖縄を含む南西諸島が亜熱帯気候である事、数百年続いていた琉球王朝時代の文化的背景あった事、さらに1609年の薩摩侵攻から現在の沖縄県になる迄の約400年の間に4度も施政権が変わり、郷土のアイデンティティを強く意識する契機が度々あった事などが相まって表出して来たと言える。特に戦後の1970年代は、施政権が米国から日本に変わる時期で、沖縄文化全般に郷土のアイデンティティを強く意識する機運が高かった時期であり、建築業界でも地域主義的建築活動^{注1)}が活発に起こっていた事は大きな要因と言える。

本土復帰前後の戦後沖縄近代建築の大きな課題の一つは、RC造等の近代建築技術と沖縄の伝統的建築様式、さらには「沖縄の風土」を取り込み融合する事を意識した建築空間の創造であり、この時期

それらを模索した建築作品が地元出身建築家の手により数多く造られるようになった^{注2)}。こうした建築作品の中でも、本土復帰直前の1970年に竣工した那覇市公会堂（現、那覇市民会館）は、戦後復興で広く用いられた近代建築技術の地元沖縄における成熟期を経て、地域主義建築思想醸成時代に入った頃の建築設計競技として実施された建物で、当時の建築家の建築的思想が色濃く表現された建築作品として戦後沖縄近代建築の代表作の一つに位置付けられている。

2. 研究の目的と方法

本研究は、那覇市公会堂に焦点を当てた既報「戦後沖縄の地域主義的建築活動に関する研究」等^{7,8)}の継続研究である。既報⁷⁾では、那覇市公会堂指名設計競技の企画運営に焦点を当て、設計競技の背景や企画立案の経緯を考察し、提案された全建築作品を系統分類して分析を行う事で、地域主義的建築活動が表現されて行く過程などを解明した。

本稿では那覇市公会堂の設計内容に注目し、実施された現代建築設計事務所^{注3)}案をさらに詳細に調査を進め、設計当時の事務所の設計体制と担当建築家の活動実態、そして公会堂設計における風土性表現の建築手法を分析し、地域主義的建築活動について考察する。特に、直接設計に携わった建築家を調査分析する事は、那覇市公会堂の設計意図に直接的につながり、建築概要の分析に大きく関連すると共に、彼らを通して当時の建築家を取り巻く世相や思想・思考を考察出来、沖縄における地域主義的建築活動の一端を明らかにする上で重要である。具体的研究方法として、設計体制などについて

写真1 那覇市公会堂全景

* 琉球大学大学院 博士後期課程

** 琉球大学工学部 教授・学博

Grad. Stud., Graduate School of Engineering and Science, University of the Ryukyus
Prof., Faculty of Engineering, University of the Ryukyus, Ph.D.

設計者である現代建築設計事務所をはじめ、関わった建築家たちの聞き取り調査を行う。事務所の設立時に関わった人たちの多くは他界しているが、沖縄県建築士会機関誌など、本人執筆の文や当時を知る人の寄稿文などがあり、その他紙面やインタビューを含め考察を進めて行く。次に、那覇市公会堂設計の建築手法については、図面及び現存する建物の調査をもとに分析する。また、この建物は建築雑誌などの紙媒体の他、放送メディアなどで当時多く取り上げられているので、それら現存する資料も含め、当時の設計及び工事関係者や当時を知る人達へのインタビューも実施し分析する。

3. 設計体制

那覇市公会堂指名設計競技当選案の設計において、中心的役割を担った建築家は二人居て共同設計で進められた。那覇市公会堂は、戦後沖縄建築のあり方に大きな影響を与えたエポックメイキングな建物で、竣工当時から県外からも高い評価を受け多くのメディアに取り上げられていたが、この事をクローズアップするメディアはほとんど見られない。1988年（昭和63年）NHKの「日曜美術館」で「沖縄・未完の設計図～建築家・金城信吉～」が放送されたが、その際にもほとんど触れられていない。本稿で改めて正確に、那覇市公会堂の設計に関わった人達について考察すると共に、当時の建築家達の建築思想を分析する必要がある。

3-1. 事務所設立経緯と役割分担

現代建築設計事務所は、1961年（昭和36年）5月1日「現代建築設計研究所」として、金城俊光により那覇市安謝（あじゃ）に設立され、直後に大村重信が参加し、翌年、金城信吉が入所して当初は総勢三人であった。金城俊光、大村重信、金城信吉は親戚関係でもあり、共に琉球政府に勤めていた経歴を持つ^{注4)}。設立当初の思いを大村は「仕事の目安があったのではなく、思いっきり設計に取り組みたいとの願望で事務所を開設した。」と振り返っている⁹⁾。1963年には琉球政府を退職した野原康輝が入所する。野原は、主に琉球政府など行政対応の役割を担い、那覇市公会堂設計競技時は代表取締役社長に就いていた。設計競技当選の年の1968年（昭和43年）9月末で退社し、自身で設計事務所を設立した。沖縄県建設業界の育成や社会公共の福祉増進などに尽力した功績から関係団体より数々の功労賞を晩年受賞する^{注5)}。

野原退社後の10月、大村が代表取締役社長に就任し、俊光は専務に、信吉は常務となった。大村重信は1998年（平成10年）に社長職を退き代表取締役会長に就任する^{注6)}。

現代建築設計事務所は、2009年（平成21年）6月11日、株式会社へ組織変更し、現在も老舗設計事務所として県内の建築設計業界を牽引している。歴代の代表取締役が多数褒章受章している事からも沖縄建築設計業界での貢献度の高さや後世代への影響の大きさが窺える。設立から数年で大所帯の事務所に成長したのだが、この事は当時の建築業界を取り巻く沖縄の事情をよく表していて、設立の50年代後半は戦後復興の建築ラッシュが続く中、建築計画が大型化し始め、公共建築を琉球政府建築課の職員だけでは対応しきれなくなり、民間の設計事務所への外注件数が増えるようになっていた。そうした時代背景で、政府より民間の方が給与の待遇が良く、若い建築士が設計事務所へ多く転職して行った。

那覇市公会堂の計画実施に当たり以下のような設計体制で進めて行った。那覇市公会堂は延べ床面積6,000㎡（竣工時延べ床面積7,010㎡）、予定総工事費160万ドルと言う大型建築であったので、事務所スタッフ総出の取り組みで遂行した¹⁰⁾。資料やヒアリングによると、那覇市公会堂設計に実際携わっていたメンバーは、金城俊光を筆頭に、金城信吉が加わり計画を練り上げ、崎浜国繁^{注7)}、名嘉真朝健らスタッフが意匠メンバーとして携わり、意匠設計以外にも含めると総勢7～8名であった。実施設計もこの体制で進められ、構造設計に関しては実施設計から西里健男^{注8)}が担当した。

図1 実施図面より抜粋

実施図面意匠図の設計担当者を示す「DESIGNED BY」の欄には「T. Kinjo」と全ての図面に直筆サインが記されていて、製図担当者を示す「DRAWN BY」の欄にも同じサインが主要な図面の多くに記されているが、これは金城俊光のサインである。「DRAWN BY」欄の随所に「Sakihama」「Nakama」と記されているのは崎浜国繁と名嘉真朝健のサインで、当時20代半ばの二人はアシスタントとして意匠設計に携わっていた^{注9)}。中ホールなどは崎浜が担当し、大ホールを名嘉真が担当した。崎浜は「大先生（金城俊光と信吉）が二人いたから苦労はなかった、ただ図面をどんどん描いて、チェックを受けていた。」と当時を振り返っている。金城信吉については、実施図面にはサインが一切記されていないが意匠設計を担っていた事がヒアリング及び信吉の遺稿から確認出来、那覇市公会堂を特徴付ける意匠計画に深く関わっていた事が把握できる。確認者「CHECKED BY」の欄全てに「S. Omura」と記されているサインは、実施当代表取締役社長の長の大村重信のサインであるが、平素から手続きや技術面を担っていて、もともと大村は構造設計者であった事もあり、自分より両金城の設計能力が優れていると評価していて設計は二人に任せていた^{注10)}。構造設計を担った西里健男は当時東京の構造設計事務所に勤めていたが、この大型建築を解析できる構造設計者が沖縄には居なかった為に呼ばれ、20代後半故郷沖縄に帰郷、公会堂の構造担当者としてたった一人で構造設計に当たった。西里によると、構造設計進める中で解析結果上の理由で、基本設計の部材メンバーやその納まりについて変更修正を掛ける事はほとんど無く、ほぼコンペ案通りに進められた。この事から上述した設計チームは基本設計の段階で、実施レベルの緻密な検討を行い、設計をまとめ上げていたと言える。この那覇市公会堂は先にも述べたが、沖縄では前例のない大型建築で

あり、後の沖縄建築に多大な影響を与えた建築であるが、主に携わったのは 30 代後半の建築家を筆頭に 20 代前半のスタッフ達による若き建築家集団であるが、成熟した建築家集団であったと言える。

3-2. 金城俊光

上述した通り、那覇市公会堂の実施図面意匠図全ての「DESIGNED BY」には金城俊光のサイン「T. Kinjo」と記されていて、彼は名実共に統括設計者としてこの建物の設計を行ったことが窺える。

表 1 年表

年/元号	那覇市公会堂	金城俊光	年齢	金城信吉	年齢
605	「流求」はじめて中国史にあらわれる				
1609	薩摩侵入				
1872	琉球藩となる				
1879	廃藩置県、沖縄県となる				
1909	初の県議会議員選挙				
1932/S 7		那覇市生まれ			
1934/S 9				南風原町生まれ	
1945/S20	終戦（金城俊光 13、金城信吉 11）				
1949/S24				沖縄工業建築科入学	14
1951/S26		沖縄群島政府工務部建築課	19		
1952/S27	琉球政府発足				
		琉球政府工務部交通局計画技術課	20	琉球政府工務部交通局建築課	17
1953/S28		退社。法政大学建築学科進学	21	沖縄工業高校健児之塔コンペ当選。第 1 番目の自宅設計	18
1959/S34			26	琉球政府退職。日本大学加藤渉教授カ-設計事務所（東京）入所。	24
1961/S36		現代建築設計事務所設立。大村重信参加	29		
1962/S37				カ-設計事務所退社。現代建築設計事務所入所。	27
1963/S38		野原康輝入所			
1964/S39				第 2 番目の住宅設計	29
		琉球政府立博物館コンペ（金城俊光 32、金城信吉 30）			
1966/S41	1/4：那覇市公会堂建設業務連絡委員会規程設置				
1967/S42	8/15：建築設計 7 社による指名競技決定	有限会社現代設計事務所に改名	35		
	10/11：山本学治と前川國男へ審査委員依頼				
	11/25：山本学治、芦原義信、我喜屋宗正の 3 人に審査員決定				
	1/10：芦原義信から大江宏に審査委員変更				
1968/S43	那覇市公会堂館設計競技当選（金城俊光 36、金城信吉 34）				
		野原康輝退社。大村重信、社長就任。			
1969/S44	4/24：那覇市公会堂着工（金城俊光 37、金城信吉 35）				
1970/S45	11/18：那覇市民会館開館（金城俊光 38、金城信吉 36）				
1971/S46				現代建築設計事務所退社。	36
1972/S47	5/15：沖縄本土復帰（金城俊光 39、金城信吉 37）				
				第 3 番目の住宅設計	37
1973/S48				門設計研究所設立	38
1974/S49				海洋博覧会沖縄館	39
1975/S50	国際海洋博覧会開催（金城俊光 42、金城信吉 40）				
1978/S53		沖縄電子計算センター	45		
1980/S55		津嘉山公民館	47		
1984/S59				逝去	49
1985/S60		逝去	53		

金城俊光は、生涯の設計活動で住宅から公共建築まで数多く手掛けた建築家である。妥協がなく純粋に設計を追及する建築家であり、彼の発言には説得力があった。昔堅気で、表に出る事を嫌う性格でもあったので、彼の言動や建築思想に関する寄稿文などの記録はほとんど存在しない。その為、関係者へのインタビューを主に調査し、彼が手掛けた直筆の図面や現存する作品を基に考察する。

父は優秀な家具木工職人で、幼少の頃から建築に触れる環境に育った為、俊光自身も空間構成に非常なこだわりを持つようになった。設計した住宅の隣地にある樹木の枝の形が風景として相応しくないと、職方に切らせに行かせた事もあり、こだわりをもって設計を行っていた。品がありながらも激しい性格の人物であったと言われる。彼の経歴は以下の通りである。1932 年（昭和 7 年）1 月 20 日那覇市生まれ。1951 年（昭和 26 年・19 歳）沖縄群島政府工務部建築課勤務。1952 年（昭和 27 年・20 歳）琉球政府工務部交通局計画技術課勤務。1953 年（昭和 28 年・21 歳）同課を退職し法政大学工学部建築学科へ進学。大学 4 年の時、胸を患って大学を中退^{注 11)}。1959 年（昭和 34 年・27 歳）再び琉球政府工務部交通局建築課に勤務するも、翌年（28 歳）6 月同課を退職し、1961 年（昭和 36 年・29 歳）5 月現代建築計事務所を那覇市安謝に開設する。1985 年（昭和 60 年・53 歳）8 月 5 日逝去¹¹⁾。俊光は現代建築設計事務所に於いて意匠設計の要となる存在であり、沖縄設計業界の若い建築家に多大な影響を与えた。手本とした建築家はフランク・ロイド・ライトで、ライトの写真をデスクに飾っていて、ライトの本を多読していた。現在子息が住む、俊光設計の自宅の書斎はほぼ生前の雰囲気そのままに残っていて、書棚には建築関連の書籍諸々、美術全集や画集で埋め尽くされ、その中に額装されたライトの写真が 2 枚飾ってある。ライトの周囲の自然環境と調和する有機的建築のあり方に大きな影響を受けていて、彼が設計した大型施設や住宅などは、水平を基調にした土地や環境と一体になるような建築構成に特色があり、ライトのプレーリースタイル¹²⁾の影響が色濃く出ている。

3-3. 金城信吉

金城信吉は、建築だけではなく幅広い活動をした建築家で、当時の沖縄建築業界に多大な影響を与えた人物である。没後 27 年が経つ 2011 年（平成 23 年）8 月 15 日、6 日間の日程で「沖縄の原風景との対話 建築家金城信吉の世界」展が生誕地である南風原町の中央公民館で開催されたが、数多くの人の来場で賑わい、彼の沖縄建築界への貢献度と重要度が如実に伝わる建築展であった。

彼の経歴を以下に述べる。1934 年（昭和 9 年）12 月 1 日南風原村（現南風原町）生まれ。終戦後の 10 歳の時に台風で自宅が倒壊し、その様を見ながら建築家になる事を志したと言う。1952 年（昭和 27 年・17 歳）沖縄工業高等学校を卒業し、琉球政府工務交通局建築課に就職する。1959 年（昭和 34 年・24 歳）琉球政府を退職して、日本大学加藤渉教授のカトー設計事務所（東京）に入所。1962 年（27 歳）カトー設計事務所を退職して帰沖し、親戚の金城俊光、大村重信の現代建築設計事務所に入社する。1973 年（昭和 48 年・38 歳）門（じょう）設計研究所設立。第三番目の自宅が日本建築士連合会第 1 回会員作品展優秀賞受賞^{注 12)}。1974 年（昭和 49 年・39 歳）沖縄国際海洋博覧会沖縄館（以下、沖縄館）^{注 13)}の設計を行う。1978 年（昭和 53 年・43 歳）沖縄県建築士会理事、1983 年（昭和 58 年・

48 歳) 沖縄県建築士事務所協会理事就任し、また建築以外にも、那覇市文化財調査審議委員、沖縄民芸協会理事、南風原町文化財保護委員、沖縄県文化財保護審議会専門委員等を歴任する。1984 年(昭和 59 年・49 歳) 敗血症にて死去¹³⁾。

1959 年カトー設計事務所に就職した東京時代に沖縄のアイデンティティを強く意識し始め¹⁴⁾、帰沖した後の 1960 年代から沖縄の民家や集落などを親泊元高¹⁵⁾らと共に探訪する中で、沖縄の伝統的建築空間の歴史的背景、赤瓦などの使われている建材、ヒンブンや雨端(アマハジ)などの建築要素の空間的及び文化的意味合い、風土に根差した沖縄建築の構成などに着目して行った。那覇市公会堂の 2 年前程前から始まったこうした活動は会館以降も継続して行っていて、建築のみならず工芸や民芸についても興味の範囲を広げて行き、彼の活動は沖縄文化全般に渡るようになった。信吉は俊光と異なり、社交的で、建築士会や新聞へ寄稿文など寄せ、積極的に言動を発信するタイプであった。傾倒した建築家は前川國男、白井晟一であったと言う¹⁶⁾。片やモダニズムの本流、片や傍流を行った両氏であるが、前川の 60 年代以降顕著に表現される地域文化に基づく風土的建築空間¹⁷⁾や、白井の印象的な建築造形と陰影の独特な扱いによる空間表現¹⁴⁾に傾倒していたと言われる。現代建築設計事務所時代と独立後の門設計研究所を通して、信吉が設計に携わった建築にはこの様な特徴が表れている。

写真 2 金城俊光¹⁸⁾ (左) 金城信吉¹⁹⁾ (右)

4. 役割分担

金城俊光と金城信吉の二人が那覇市公会堂の設計を中心的に行った人物である事が資料やヒアリングにより確認されるが、二人の役割分担がどのようであったかが明らかでない。ヒアリングによると、事務所での設計において二人は総じて細かな打ち合わせ無しで個別に作業を進めていて、構造担当者との打ち合わせは崎浜ら担当者が主に行い、金城両氏は立ち会わなかった。こうしたことから、当時の担当者でも二人の具体的な役割分担を明言できない為、残された資料やインタビューから考察を行った。

全体の立面や断面については、信吉もスケッチを行っていたようだが、当選案として設計されたものは、俊光の設計が主体となっていたと解釈できる。先にも述べたが、俊光設計の建物の特徴は、水平線を強調し敷地に馴染む構成である。立面図や設計競技時に提出された模型写真を見るとその特徴が見て取れる。メインエントランスからプロムナード、そして増築予定だった美術館までの動線は立体的ではあるが、緩やかな大階段で始まり、全体の大きなスケールの中で水平方向の要素が強調されている。信吉の代表作の一つ沖縄館も全体を覆う大きな屋根が特徴的で軒先の水平ラインが効いてい

るが、全体の印象として勾配のきつい寄棟屋根が突出した造形となり、水平要素が際だって感じられないオブジェのような建築である。他の信吉設計の建物も、造形的な要素が強く現われている特徴があり、那覇市公会堂の敷地に馴染む水平的要素は前面に出てこない。全体的な外部仕上げや表現についても俊光によるものと言え、那覇市公会堂以降の俊光が携わった幾例の建築計画にも類似表現が確認できる。大ホール舞台部分外壁の荒いコンクリート打ち放しは「のっぺらぼうでは何も意味が無い」と言って、俊光がこだわった仕上げである²⁰⁾。那覇市公会堂以降、現代建築設計事務所は多く会館などの設計競技に参加していて、俊光が担当し自身が作図した図面が残っているが、水平を基調とした構成や瓦以外の部分の外壁表現など類似点が多い。ただし、那覇市公会堂指名設計競技裁定理由書(以下、裁定理由書)¹⁵⁾で触れられている「庇」は、信吉によるものと認められる。那覇市公会堂外部を印象付けている瓦屋根のような庇は特徴的な意匠で、さらに下部空間は雨端として設計されている。雨端は俊光設計の自邸にも設計されているが、空間構成は伝統的な趣をそのまま継承している。1970 年(昭和 45 年)前後に設計された信吉の自邸の屋根は、那覇市公会堂のパラペットの形状から屋根のこう配角度までもが酷似していて、空間構成上も同じ雨端として計画されている。また、葺かれている瓦についての発案も信吉であり、瓦の陰影の見せ方にこだわりを持っていて、瓦業者と試作を繰り返し仕様決定され²¹⁾、屋根の角度や形状等と共に検討がされていた。これらを総合的に考察すると、屋根及びそれに関わる表現は信吉によるものと認められる。

平面構成については、俊光の特徴がよく表れている。俊光が作図した宜野湾市民会館コンペ案は、ホワイエから客席ホールそして舞台及び舞台袖の平面計画が類似している。嘉手納庁舎コンペスキス図面の平面構成などは、分棟型配置でオープンエアのポーチ空間が行政部分エントランスとホールエントランスを繋いでいて、那覇市公会堂のプロムナードに通ずるものがある。断面構成についても俊光が担ったと思われる。直線的な構成の印象が強い俊光の設計だが、ホールの客席部には曲線を使っている。音響効果考慮していると思われるが、宜野湾市民会館や嘉手納庁舎の断面デザインはこの構成に酷似している。こうしたことから、平面・断面構成は俊光によるものと推察される。

裁定理由書で評価された「石積み壁体」はヒンブンを指すが、これについては信吉に負うところが大きい。上述した信吉の自邸では、那覇市公会堂同様室内にヒンブンが設計されていて、さらに沖縄館では同じ石積仕上げの石垣を重要なコンセプトとして設計し、外部(雨端空間)及び内部(エントランスホール)に配置している。俊光設計の建物には、ヒンブンは重要なコンセプトとして設計にほとんど計画されていない。先にも述べたように、信吉が平面や立断面の計画に全く関わらなかったと言う事は無かったと思われ、外観を特徴付ける勾配屋根をどの様に構成して見せるか、外構やメインエントランスに配置されたヒンブンを具体的にどの様に設計して行くかを検討していたと言えるが、大きく分けるとこのように、設計のアウトラインは俊光が主体となって決め、その方向に沿う形で信吉が意匠表現を分担して行ったものと推察される。表 2 に、那覇市公会堂の建築表現と二人の設計した他の建築作品に於ける表現比較した表を示す。

表2 建築意匠比較表

	那 覇 市 公 会 堂	類似性が確認できる計画又は部分	左図の 設計者	解 説
立 面	<p>南側立面（沖縄赤十字病院側）</p>	<p>宜野湾市民会館コンペ案・立面図(1977年)</p>	俊光	大きなスケールの中で水平要素が効き、敷地に馴染む建築表現が成された那覇市公会堂。宜野湾市民会館の他類似施設の設計に於いて俊光設計の建築計画には、水平方向の強調、瓦以外の仕上げ等類似点が多い。
平 面	<p>1階・中2階平面図（実施図面）抜粋</p>	<p>嘉手納町庁舎コンペ案・1階平面図抜粋(1981年)</p>	俊光	那覇市公会堂の平面計画については、機能的に計画されている点が裁定理由で高く評価されている。大ホール部分の平面図抜粋である。那覇市公会堂や嘉手納町庁舎ホール他、俊光設計の類似施設には類似点が多い。
断 面	<p>断面図（実施図面）抜粋</p>	<p>宜野湾市民会館コンペ案・断面図抜粋(1977年)</p>	俊光	那覇市公会堂断面計画は合理的かつ機能構成に無駄がない。俊光設計の大型ホールでは全体的構成かつホール断面の曲面形状に類似点多く確認できる。
雨 端	<p>雨端矩形図（実施図面）抜粋</p>	<p>雨端矩形図／金城信吉邸（実施図面）抜粋(1972年)</p>	信吉	懐深い雨端が特徴の那覇市公会堂。信吉自邸の屋根形状も懐深い雨端で設計されていて、公会堂と酷似している。俊光自邸にも雨端が設計されているが、伝統的な形状で構成され公会堂とは異にする。
ヒ ン プ ン	<p>ロビー内観写真</p>	<p>第3番目の自宅(金城信吉邸)・居間食事室を玄関より見る</p>	信吉	本来外部に作られるヒンブンが、公会堂では屋内にも設計されている。そして、信吉自邸でも室内ヒンブンが設計されている。一方、俊光設計の建物ではヒンブンが主要なコンセプトとして計画されたものは無い。

5. 風土性の表現

戦前の公会堂は、ルネッサンスを基調とした木造2階建て建築であったが¹⁶⁾、この那覇市公会堂は敷地面積8,552㎡、建築面積4,653㎡、延床面積7,010㎡、地下1階地上3階建て、最高軒高22.2m、収容定員1,800名の大ホールと中ホールを備える鉄骨鉄筋コンクリート造（以下、SRC造）、RC造および鉄骨造（以下、S造）の混構造大規模建築である²²⁾。金城信吉は設計競技で「沖縄の風土性・造形性に関わりを持ちながら現代建築に（風土的、伝統的）意味づけようという考えで進んでいった」¹⁷⁾と当時を振り返っている。那覇市公会堂の特徴はファサードに顕著に表れていて、沖縄の伝統的空間及び表現構成が近代建築技術を用いて具現化されている。

5-1. 庇の設計

裁定理由書でも触れられている、那覇市公会堂の外観を特徴付けている「庇」は屋根と見間違えるような構成で、陸屋根パラペットを頂部として2階プロムナード、ホワイエ前通路の軒レベルまで約8.5mの高さ、傾斜角約60°を成す2階々高全部を覆う寄棟屋根のような大規模な庇となっていて、軒天が張られていない為1層分の懐深い大空間で、内外を結ぶ軒下空間が作り出されている。ここに沖縄伝統的空間の「雨端」²³⁾を現代建築の中で再構成する試みが提案されている。金城信吉は30歳前後に多くの民家を見て回ると、雨端を沖縄の伝統的空間構成要素として再認識し、さらに自身の原風景にもあるこの空間に関心を抱いていて、雨端を新しい視点から解釈して近代建築に再考する事を考えて公会堂で実践した。設計競技の際に沖縄の風土に根ざした建築表現の提案として「日陰の外廻り空間を作り、重厚でほりの深い彫刻的な美しさを求めた」と記されている事からも、公会堂の雨端空間は重要な提案として位置付けられていた事が分かる。

那覇市公会堂以降の戦後沖縄近代建築では、住宅から大型公共建築まで雨端をコンセプトに引用している建物が多く設計され、1999年（平成11年）竣工の浦添市役所、2002年（平成14年）竣工の美ら海水族館等様々な意匠形態で表現されている。

5-2. 壁の設計

「庇」と同じく裁定理由書に記されている「石積み壁体」は、沖縄の古民家にある「ヒンブン」を基に提案された建築要素を指している。那覇市公会堂では、ヒンブンも近代建築の中で再考する試みが成された提案である。

沖縄の屋敷空間を構成する特有の要素であるヒンブンは起源、用途、意味合い等について定説はなく、幾つかの説がある¹⁸⁾。諸説ある中で信吉は、ヒンブンは「アプローチに折目と秩序をもたらすための空間処理の配慮から生み出されたもの」¹³⁾であると捉え、その建築的意義にかねがね関心を持っていた。

那覇市公会堂では、底下1階外部と内部の玄関ホールとラウンジ間のスキップフロア一段差部分にヒンブンを配置している。これらはどれも、緊張感のある空間作りの為に用いていて、大底下エントランス階段両脇に設けられたヒンブンは、1階部分窓などの細々とした建築要素を隠す位置取りの為、大規模な庇と大階段がより強調されファサードのコンセプトを明確にして、エントランスに引き締まった秩序を作り出している。

内部の玄関ホールとラウンジの間にあるヒンブンは、霽れと藁の領域を空間処理するものとして用いている。玄関ロビーまでを外界の日常と捉え、ラウンジ側を催し物などが行われる非日常の世界と捉えた。信吉は、ヒンブンを単なる造形的概念として捉えて無く、「結界」のような象徴的概念で建築に取り込んで、内部空間に秩序を作り出している。

ヒンブンは元来外部に設けられるので、内部に用いるのはとても珍しく、那覇市公会堂が初めての事例と言える¹⁸⁾。沖縄の古民家は家屋と敷地を一体の物と考え、文字通り「屋敷」として全体を捉えていた。ヒンブンの建築的意義を踏まえ近代建築に再考する際、こうした古民家の敷地と家屋の関係性の捉え方から、屋外にとらわれず屋内に設ける着想が出て来ている²⁴⁾。信吉是那覇市公会堂以降、自宅や実現しなかったコンペ案などでヒンブンを積極的に取り入れた設計を行っていて、沖縄館では池に「水のヒンブン」と称した噴水を設計し、材料の固定観念にとらわれない建築的意義に基づいた新しい提案も行っている。

図2 実施図面矩計図より抜粋

5-3. 仕上げ材の設計

古くから民家の屋根に使われ沖縄の景観を作る主要な要素となっている「赤瓦」が、ファサードを印象付けている大庇の仕上げに使われている。赤瓦が使われた理由は二つあり、その一つは県産品愛用の機運が当時ありその一環であった事と、もう一つの理由は、信吉は赤瓦の質感、色合い、肌合い、そしてそれらの経年変化で醸し出される風化した趣に魅力を見出していた事が挙げられる。さらに、郷土の建材とRC造等の近代建築技術との調和は当時の建築設計業界の重要な課題でもあったので、赤瓦の使い方には非常にこだわりを持って取り組み、新しい使い方が提案された²⁵⁾。

実施図面外部仕上げ表には「在来ミーガーラー切断小口貼り」と表記されていて、加工した赤瓦を小端積みして仕上げている²⁶⁾。

信吉は、瓦の断面を生かした外観表現を目指して赤瓦を切断加工した。加工に当たり女瓦（ミーガーラ）を使用し、煉瓦 JIS 規格に合わせて長手幅 210mm、短手幅 45mm 棒状瓦に決定し、型を一切使わず、使用する瓦全て女瓦を切断加工した物を実施にて使用した^{注16)}。この仕上げ方法により屋根面に瓦の凹凸が出て陰影が際立ち、大庇の存在感が増す表現となった。

写真3 那覇市公会堂エントランス外観

図3 瓦屋根詳細図(左)外部仕上げ表(右)施工図抜粋

5-4. 構造計画

当選案は平面計画や建築意匠の他、構造計画についても裁定理由書の中で評価を受けている。

全体的な構造構成を西側の中ホールから整理すると、中ホール棟は主要構造をRC造で設計され、地下が機械室、1階が事務室部分の為、柱のスパン割りが経済スパンの範囲で均等に柱割りされている。2階の中ホールは主要構造をRC造とした無柱空間の大きな空間になっていて、ホール屋根はS造トラスの小屋組みで、ホール以外はRC造屋根スラブで設計されている。東側舞台部分はX方向15mスパンではあるが、Y方向に耐力壁になる壁が地下から屋上階まで十分にあり、屋根はS造トラスの小屋組みで主要構造をRC造とした設計である。大ホールの大きな空間は主要構造にSRC造が採用され、屋根はS造の小屋組みで設計されている。

裁定理由書で、「将来予定されている美術館へとつながる公共空間を創り出した秀でた着想である」と高い評価を受けたプロムナードであるが、その大階段はSRC造で設計され、公会堂の正面を印象つけるダイナミックな空間構成を実現している^{注27)}。支柱の無い23mのスパンの大階段を低いライズで設計する事で、全体として水平要素が際立ち、敷地に馴染む建築表現となっていて、この表現を実現する為にSRC造を採用した。那覇市公会堂の構造は、空間構成を効果的に実現する為に新しい建築技術としての構造計画を適宜選択して無駄なく設計されながらも、ダイナミックな空間構成を実現した。

特に那覇市公会堂の特徴の一つとなる大庇は、片持ちの懐深い雨端空間形成を可能にし、陰影を際立たせ、沖縄の伝統的建築空間を近代建築の表現として設計された。

この後、金城信吉と構造担当の西里は、現代設計を退社し独立するが、信吉は自身設計の構造設計を西里に依頼する関係になり、沖縄館など幾つかの代表作を輩出している^{注28)}。

写真4 那覇市公会堂・SRC造鉄骨建方工事写真^{注29)}

6. まとめ

本稿では、復帰前後の沖縄でアイデンティティーの模索がなされていた時期に設計・施工され、建築界に大きな影響を及ぼした那覇市公会堂に着目し、公会堂の設計体制の考察を通して携わった建築家の役割分担を明らかにした。さらに、これら考察結果及び計画概要の分析により、戦後沖縄における地域主義的建築活動を明らかにした。その内容は以下に集約される。

1. 那覇市公会堂設計の中心的役割を担った建築家は金城俊光と金城信吉の二人で、俊光が主体となり設計のアウトラインを決め、その方向に沿う形で意匠表現を信吉が分担して行った。
2. 建築文化における沖縄のアイデンティティーの模索が行われる中、近代建築と地域の風土に関する幅広い知見の中から意匠を再編し、沖縄の伝統的な空間構成や建材等の再認識と新しい建築技術との融合を設計に試みた。その結果、那覇市公会堂では「雨端、ヒンブン、赤瓦」を引用する事により戦後沖縄の近代建築に新たな風土性の表現を提示した。

戦後沖縄の近代建築の成立背景には本土復帰など大きな社会変革期が重なり、地域主義的建築活動の研究にとって重要な研究対象時期である。しかし、本稿では那覇市公会堂に限定している為、沖縄における包括的な地域主義的建築活動の知見を得る事は出来ない。今後、他の建物の調査や建築家の思想、業績の考察により得て行きたい。

謝辞

本論作成にあたり現代設計とそのOBの方、金城俊光・金城信吉両氏のご息を始め、当時の工事関係者や当時を知る方の協力を得た。御協力頂いた方々に謝意を表す。

参考文献

- 1) 小倉暢之:戦後沖縄におけるコンクリートブロック品質保全法の成立過程, 日本建築学会九州支部研究報告第4号, pp593-596, 2004
- 2) 小倉暢之:戦後沖縄のコンクリート建築普及における設計技術の特質-郵便局舎の平面について-, 日本建築学会九州支部研究報告第41号, pp425-428, 2002

- 3) 小倉暢之:戦後沖縄のコンクリート建築普及における設計技術の特質その 2 計の背景と平面計画, 日本建築学会九州支部研究報告第 42 号 pp621-624, 2003
- 4) 具志堅華絵, 小倉暢之:-戦後沖縄近代建築における建築家具志堅博の設計活動に関する研究 - コンクリート造建築の普及と設計手法を中心として -, 日本建築学会九州支部研究報告第 49 号, pp549-552, 2010
- 5) 中島親寛, 池田孝之, 小倉暢之:戦後の沖縄における沖縄住宅公社による米軍住宅建設プロセスと計画管理技術に関する研究, 日本建築学会計画系論文集第 566 号, pp105-111, 2003. 4
- 6) 中島親寛:沖縄住宅公社に関する研究-設立背景と建設技術を中心として-, 琉球大学大学院修士論文, 2000
- 7) 前田慎, 小倉暢之:那覇市公会堂設計協議の企画運営に関する研究-戦後沖縄の地域主義的建築活動に関する研究その 1-, 日本建築学会計画系論文集第 703 号, pp2031-2038, 2014. 9
- 8) 前田慎, 小倉暢之:那覇市民会館について-戦後沖縄の建築家金城信吉の建築活動に関する研究その 1-, 日本建築学会九州支部研究報告第 51 号, pp829-832, 2012. 3
- 9) 現代建築設計事務所パンフレット, 1985
- 10) 野原康輝:戦争体験 建築と私の半生, 自費出版, 2002
- 11) 沖縄県建築士会:沖縄建築, vol. 28, 40 周年記念誌, 1996
- 12) 谷川正己:フランク・ロイド・ライト, 鹿島研究所出版会, 1966
- 13) 金城信吉:沖縄原空間との対話, 自費出版 1983
- 14) SD 編集部:現代の建築家 白井晟一, 鹿島出版会, 1976
- 15) 那覇市:那覇市公会堂指名設計競技作品集, 那覇市, 1968
- 16) 川島智生:大正期沖縄県下における公共建築の特性-「琉球」的な風土との関係-, 神戸女学院大学論集, 第 54 巻, 第 2 号, 2007
- 17) 沖縄県建築士会:沖縄建築, vol. 17, 1983
- 18) 親泊元高:念慮録, 自費出版, 1979
- 19) 沖縄県建築士会:沖縄建築, vol. 41, 2011
- 20) 沖縄県建築士会:沖縄建築, vol. 40, 2010
- 21) 宮内嘉久:前川國男 賊軍の将, 晶文社, 2005
- 22) 琉球土地住宅新聞社:琉球土地住宅全書, 琉球土地住宅新聞社, 1970
- 23) 新建築社:新建築 特集 沖縄海洋博・沖縄の建築, 第 50 巻 9 号, 1975

注

- 注1) 本稿での戦後沖縄における地域主義的建築活動とは、米軍施設建築のような国際様式的建築表現ではなく、また戦前の琉球建築の様式を復原しただけの建築表現でもなく、沖縄の気候、文化、風土を意識し、近代建築技術である RC 造等を用い、それらを融合した新しい建築表現を志向する活動を地域主義的建築活動と定義する。
- 注2) 1953 年沖縄立法院庁舎（大城龍太郎）、1957 年那覇市納骨堂（仲座久雄）、1964 年琉球政府立博物館（我那覇昇）、1968 年琉球高等裁判所庁舎（又吉真三）が那覇市公会堂前に実施された設計競技で、近代建築技術と沖縄の伝統的建築様式さらには沖縄の風土を取り込む事を意識した建築空間創造が模索された。（ ）内は当選案設計者を示す。
- 注3) 現、株式会社現代設計。1961 年（昭和 36 年）5 月 1 日設立。1967 年（昭和 42 年）4 月 28 日、有限会社現代設計事務所に改名。1998 年（平成 10 年）4 月 10 日、現在の現代設計の名称に変更、2009 年（平成 10 年）6 月 11 日、株式会社へ組織変更。
- 注4) 大村と信吉の母として利光の父は兄弟で大村は末っ子。年齢は大村が一番年上で、利光、信吉の順となる。独立事務所設立に当たる 3 名の時系列は、参考文献における年表及び沿革と関係者へのインタビューを元に総合的に考察してまとめた。
- 注5) 野原康輝（のはら・こうき）1981 年（昭和 56 年）には藍綬褒章を受章、1993 年（平成 5 年）勲五等双光旭日章、2005 年（平成 17 年）沖縄県功労者表彰を受けている。2010 年（平成 22 年）逝去¹⁹⁾。
- 注6) 大村重信（おおむら・じげのぶ）1989 年（平成元年）黄綬褒章受章。2008 年（平成 20 年）逝去²⁰⁾。
- 注7) 崎浜国繁（さきはま・くにしげ）1944 年 11 月生。本部町出身。沖縄工業高等学校建築学科卒。現代建築設計事務所入社、後に専務取締役になる。2004 年國設計設立。
- 注8) 西里健男（にしざと・けんお）1937 年 9 月生。伊良部町出身。関東学院大工学部建築科卒後、東京にて複数の設計事務所で構造設計を行う。那覇市公会堂当選の昭和 43 年から落成の昭和 45 年まで現代建築設計事務所勤務。沖縄工業高校教諭を経て、西里建築研究所設立。沖伊良部郷友会長などを務める。
- 注9) 実施図面は意匠図、構造図（31 枚）、舞台装置図（16 枚）、電気設備

- 図（58 枚）、給排水設備図（9 枚）、空調設備図（14 枚）、その他（13 枚）。現在、那覇市文化振興課にて保管。意匠図総数 55 枚。「DRAWN BY」の内訳は、「T.Kinjo」11 枚、「K.Sakihama」19 枚、「C.Nakama」15 枚、「S.Aka」6 枚、「R.Kise」2 枚、「S.Nohara」2 枚。利光は配置図、仕上表、各階平面図、各立面図、天井詳細図等の主要図面を製図している。製図枚数から、崎浜と名嘉真が主要なスタッフだった事も窺える。
- 注10) 大村は事務所の取締役として意匠図、構造図に確認サインを入れていて、意匠計画について主唱し先導していたと言う証言は得られなかった。
- 注11) 法政大学に金城俊光在学中のこの頃、那覇市公会堂指名設計競技審査委員長になる大江宏は法政大学教授に就任している。俊光の胸の患いは結核であったと言われている、卒業を前にした 4 年次で中退帰郷となった。
- 注12) 2002 年には第 4 回日本建築家協会（JIA）25 年賞受賞。この年、住宅部門では安藤忠雄の「住吉の長屋」も受賞している。
- 注13) 1975 年に沖縄で開催された「沖縄国際海洋博覧会」の沖縄県展示館として建設された。設計は海洋博沖縄設計共同企業体で建築設計を金城信吉が行った。地下 1 階地上 2 階、延べ床面積 1,964.83 m²、最高高さ 22.4 m、主要構造 RC 造一部 S 造の正方形平面プラン。最大の特徴は方形寄棟造りの大屋根で仕上げは赤瓦が使われている。当時、沖縄県内最大規模の赤瓦屋根で屋根面積 3,330 m²、瓦枚数約 12 万枚（民家約 20 件相当）が使われたと言われている。1996 年休館、その後解体された。
- 注14) カトー設計事務所での 3 年間は建築の技術的な基礎を実務通して学び、建築意匠の見聞は東京を中心として東北から九州までの各地の建築を見学してまわる中で深めて行った¹³⁾。カトー設計事務所への入所は友人の紹介であると言われる。
- 注15) 親泊元高（おやどまり・げんこう）1938 年～没年不明。1962 年日本大学郡山工学部建築学科卒。1963 年～1975 年沖縄工業高等学校建築科。1975 年から美里工業高等学校建築科教諭。高校教諭の傍ら、沖縄の伝統文化などの研究調査を行い「建築雑誌」（日本建築学会）や「沖縄建築」（沖縄県建築士会）等に論文や寄稿文を発表する研究者でもあった。
- 注16) 崎浜国繁氏に当時を知る関係者へのインタビューによる。
- 注17) 「日本的」と言う言葉を用いて 60 年代以降の前川建築は表現されているが²¹⁾、本稿では包括的に表現する言葉として「風土的」と表現する。
- 注18) 金城俊光子息所蔵。那覇市公会堂落成式にて撮影。38 歳当時。
- 注19) 金城信吉子息所蔵。第 1 回建築作品展レセプション会場にて撮影。39 歳当時。
- 注20) 金城信吉設計の南風原町立中央公民館（2011 年 12 月解体）でも荒いテクスチャーのコンクリート打ち放し仕上げがあるが、崎浜国繁氏へのインタビューにより証言を得た。
- 注21) 使用する膨大な枚数の赤瓦は工事前から前もって準備を進めていた。この仕上げ方法により瓦断面の凹凸の陰影がより際立ち、大庇の存在感が一段と増す建築表現となった。公会堂以降、赤瓦の建材としての認知度が上がった。那覇市公会堂の瓦製作を行った有限会社八幡瓦工場の代表取締役 八幡昇氏へのインタビューによる。
- 注22) 設備を含む総工事費を見ると、竣工延床面積における坪単価は \$861/坪であり、設計事務所が設計した当時の RC 造住宅の坪単価が概ね \$380～400/坪であり²²⁾、規模も内容も大規模な計画であった事がわかる。
- 注23) 雨端は沖縄独自の空間ではなく、日本建築の縁側や土庇などの下野空間がそれに該当するが、それらとの特異性は軒先から建屋までの深さであり、沖縄の雨端は一段と深い空間となっている。亜熱帯の厳しい気候に対する対策として、琉球王朝時代から積極的に住宅へ取り込まれ特徴的空間となっている。
- 注24) 金城信吉は新建築²³⁾の寄稿文の中で「沖縄民家の石垣は建築の一部である」と屋敷囲いの石垣について述べている。
- 注25) 1983 年（昭和 58 年）若手による座談会「なぜ、沖縄なのか?」¹⁷⁾の中で、材料の選び方、赤瓦の使用方法について議論されていて、郷土の建築表現に重要な建材の一つと捉えられていた。また、前年の 1982 年（昭和 57 年）には沖縄赤瓦事業協同組合が設立され、RC 造建物が主流になっている現在に適応した改良瓦の製造開発に取り組んでいる。
- 注26) 沖縄の瓦屋根は漆喰で塗り固める施工方法なので小端積み施工された屋根瓦は沖縄に無い。
- 注27) 西里健男氏へのインタビューによると、支柱の無い大階段を実現することにこだわって設計が進められた。
- 注28) 公会堂の後に設計される第 3 番目の住宅や沖縄館も混構造建築であり、沖縄の気候や風土を考慮した地域主義的建築表現として評価が高い建築作品である。
- 注29) 西里健男氏所蔵。

STUDY ON THE DESIGN OF THE NAHA CIVIC HALL

Study on design activity of the regionalism in postwar Okinawa Part 2

Makoto MAEDA and Nobuyuki OGURA***

* Grad. Stud., Graduate School of Engineering and Science, University of the Ryukyus

** Prof., Faculty of Engineering, University of the Ryukyus, Ph.D.

The Naha civic hall, built by a design competition in 1970, is the renowned modernism architecture in postwar Okinawa as one of the most important works that express the regionalism design. This paper is the continuing study of the previous paper that focused on the significance and the process of the draft of the design competition and the role of the Naha city office that has encouraged the quest for the new modernism that reflects the Okinawan identity through the design competition that contributed greatly to the development of the regionalism architecture there since then. This paper examines the design activity of the regionalism in postwar Okinawa overviewing the architects' activity on the Naha civic hall design and also has a focus on the concepts and design methods of the hall design that has revealed a characteristic approach for the local architecture and also on the actual situation of the architects' role in the project.

Postwar Okinawan modern architecture has a characteristic background of advanced concrete building technology that had been introduced by the US military since around the 1950s till 1972 when Okinawa has been reversed to Japan. At the time Okinawa was a most advanced area compared with main land Japan in terms of building technology. In its early stage of the architecture, most architects' design reflected the so-called international style that is functional and regardless to the regional difference. However, in the late 60s, it occurred that the movement of cultural identity encompassing the whole fields of cultural activity and the society. According to the movement, the local architect society had also given their interest in the design activity naturally.

Among the local architects society, two architects, whose names are Toshimitsu Kinjo and Nobuyoshi Kinjo of the Gendai Architects Engineers & Consultants, Inc. who designed the hall, played a remarkable role in introducing a new modern regional style marrying modern design with regional design motifs based on their profound scholarship in the modernism and the traditional architecture in Okinawa where has a characteristic culture composed of historical tradition and subtropical climate that differ from those of mainland Japan. Toshimitsu was a chief designer at the office and the project leader of this hall design. However it is said that he has an old-fashioned character not to compromise and was a person of few words especially for the media. On the other hand Nobuyoshi was an eloquent speaker and left numerous comments, and this contrast caused the ambiguous role of design for both architects in the media later. Nobuyoshi was interested in overall culture of Okinawa including folk handicraft and industrial arts and made a wide research over islands. And his deep understanding of the culture has reflected on the shape of the hall.

In terms of their role allotment in the hall design, following authors' research by interviews to related persons and documents, it can be said that Kinjo Toshimitu was the project leader of the hall and took a role of basic design of the whole planning including site plan, section and elevation design. And Nobuyoshi took a role of design methods that were applied in eaves, walls and tiles referring to traditional motifs: Amahaji for eaves, Hinpun for walls and Akagawara for exterior finish. And their successful collaboration has resulted in the establishment of modern regional style in postwar Okinawa and the clear design style made a significant influence on the local architecture after that.

(2015年1月10日原稿受理, 2015年6月5日採用決定)